

香川県産のアブラコウモリ *Pipistrellus abramus* の
外部形態について

森井隆三 小笠原康裕 渡辺謙 川原省吾

(高松南高等学校)

External characters of *Pipistrellus abramus* in Kagawa Prefecture, Japan
Ryuzo MORII, Yasuhiro OGASAWARA, Ken WATANABE and Shogo KAWAHARA
(Takamatsu-Minami Senior High School, Takamatsu-shi)

Of the thirty-three specimens of *Pipistrellus abramus* (Temminck, 1835) collected by the authors at Toyonaka-cho of Mitoyo-gun in Kagawa Prefecture on July 30th, 1971, thirteen were adult-females and twenty juveniles. This population was birth group. The growth of hind foot in juvenile-group was observed as early one. Remarkable differences between adult-and juvenile-group were observed in the other part of the body.

アブラコウモリ(イエコウモリ) *Pipistrellus abramus* (Temminck, 1835) は、夕暮に餌を求めて、社寺、民家の周辺で飛びかう姿を時々見る。また、コウモリとして普通に親しまれている種で、屋根裏とか、板をはり合わせた壁の中等に住んでいる。香川県においては、このアブラコウモリについての測定記録は、今までに見られない。

筆者等は、1971年7月30日正午過ぎから、17時頃にかけて、香川県三豊郡豊中町笠田竹田245、香川県立笠田高等学校の旧校舎等でアブラコウモリの採集を行ない、成獣の雌13頭と生後約1ヶ月の幼獣の雄8頭、雌12頭の合計33頭を得た。この個体群は明らかに出産集団である。このような colony の採集は、なかなかできないので、貴重な資料であると思われるから、ここに記録しておく。

なお、調査にあたって多大な御協力をいただいた笠田高等学校長後藤虎三郎氏、事務長高橋謙蔵氏、教諭高橋剛氏に対して厚く感謝致します。

生息状況：香川県立笠田高等学校は市外地にあり、周囲は主に水田のため、餌となる昆虫類はかなり豊富なおもわれる。

アブラコウモリが生息していたのは、老朽校舎になっている二階建の屋根裏で、排気窓の近くの土壁の割れ目と、農産加工室の土壁の上に板を重ねてはり合わせたすきまである。この重ねてはり合わせた板をはい

でみると、長年にわたると思われる糞が堆積していた(写真)。この糞の上部に2~3頭が寄りそって住んでいた。

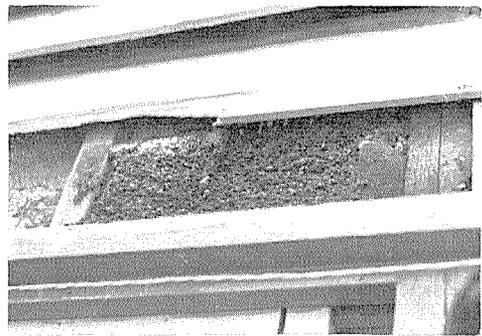


写真 壁と板の間に長年の糞が堆積していた。

コウモリが生息しているのに気付いたのは、毎日ていねいに清掃をするが、次の日には多くの糞によって、下がよごされていたためである。学校当局としては、なんとか退治しようとして筆者の所に連絡があった。しかし、今の所、退治する方法はない。これは、コウモリによる公害の1つであろう。なお、ここに生息していた数は約150頭と思われる。

調査標本：今回の調査によって得られた笠田個体群33点は、液浸標本として、香川県立高松南高等学校に保存している。捕獲した幼獣群は飛翔することができ

る。親の乳房は大きく、すぐ確かめられる所から、授乳期の個体群と思われる。これら幼獣群と成獣群の体各部の大きさは Table 1 の通りである。

中手骨：幼獣群の中手骨の関節は、まだ十分に骨化

していない。中手骨長は、幼獣群では第 2, 第 3, 第 4, 第 5 の順に長くなっているが、成獣群では、第 2 中手骨が一番短かく、第 3, 第 4, 第 5 中手骨はほぼ同長である。

Table 1 External characters of *Pipistrellus abramus* (in mm)

		N	M±SE	S D	90% confidence limits of M±SE	95% confidence limits of M±SE	
Forearm	ad.	13	32.60±0.36	1.30	31.93~33.27	31.77~33.43	
	juv.	20	27.02±0.40	1.77	26.67~27.77	26.10~27.94	
Head & boby	ab.	13	47.25±0.60	2.15	46.13~48.37	45.86~48.64	
	juv.	20	39.43±0.49	2.19	38.51~40.35	38.30~40.56	
Tail	ad.	13	38.15±0.52	1.87	37.18~39.12	36.90~39.35	
	juv.	20	26.52±0.75	3.37	25.12~27.92	24.79~28.25	
Hind foot (c.u.)	ad.	13	7.25±0.15	0.54	6.97~ 7.53		
	juv.	20	6.96±0.14	0.63	6.70~ 7.22		
Tibia	ad.	13	13.12±0.34	1.22	12.30~13.94	12.33~13.91	
	juv.	20	10.74±0.23	1.03	10.31~11.17	10.21~11.27	
Ear	ad.	13	11.14±0.38	1.38	10.43~11.85	10.26~12.02	
	juv.	20	9.33±0.23	1.03	8.90~ 9.76	8.80~ 9.86	
Tragus	ad.	13	5.70±0.15	0.54	5.42~ 5.98	5.35~ 6.05	
	juv.	20	4.62±0.14	0.62	4.36~ 4.88	4.30~ 4.94	
Metacarpus	2th	ad.	13	28.11±0.34	1.21	27.47~28.75	27.32~28.90
		juv.	20	19.00±0.45	2.00	18.16~19.84	17.96~20.04
	3th	ad.	13	29.90±0.31	1.10	29.32~30.48	29.18~30.62
		juv.	20	20.92±0.43	1.92	20.12~21.72	19.93~21.91
	4th	ad.	13	29.97±0.30	1.09	29.41~30.53	29.28~30.66
		juv.	20	21.36±0.47	2.12	20.48~22.24	20.27~22.45
	5th	ad.	13	29.38±0.33	1.18	28.76~30.00	28.62~30.14
		juv.	20	22.02±0.38	1.68	21.31~22.73	21.14~22.90

しかし、これらの両個体群の平均値の95%信頼限界は重なりあわないので、両個体群に差があることは確かである。

後足長(爪共)：調査した幼獣群と成獣群のそれぞれの平均値の90%信頼限界は重なりあっているため、年齢による差は認め難い。これは、後足長の生長が、

早く完了するためと思われる。これは、洞窟棲のモモジロコウモリ *Myotis macrodactylus* と異なる点で、生活態のちがいによるものと思われる。

脛骨長に対する後足長（爪共）の比（Table 2）：成獣群では、平均55.82%，幼獣群では平均65.08%で

あった。これも、平均値の95%信頼限界が互に重なりあわないので、両個体群間には、確かに差がある。これは、本種では脛骨長に比して後足の生長が早いことを意味し、脛骨長の早く生長する屋島洞窟のモモジロコウモリと異なる点である。

Table 2 脛骨長に対する後足長の比 (%)

Age	N	M±SE	SD	M+SEの90%信頼度	M±SEの95%信頼度
Ad.	13	55.82±2.18	7.85	51.74~59.90	50.78~60.86
Juv.	20	65.08±1.55	7.13	62.18~67.98	61.50~68.66

体各部の成獣に対する幼獣の比（Table 3）：

今回捕獲した個体群の調査からみると、前腕長 82.88% 後足長（爪共）93.00% 脛骨長 81.85%，耳介長

82.85%，耳珠長81.05%であった。このことから、アブラコウモリにおいては、他の部分に先がけて、これらの体各部が、早く生長を完了するものと思われる。

Table 3 体各部の成獣に対する幼獣の比 (%)

部 位	前 腕	頭 胴	尾	後 足 (爪共)	脛 骨	耳 介	耳 珠	中手骨 第 2	第 3	第 4	第 5
%	82.88	62.28	69.78	93.00	81.85	82.85	81.05	67.59	69.94	69.94	75.29

他の個体群との比較：詳しい資料はないが、九州産のアブラコウモリは、前腕長33~34mm前後(内田と)ということであるから、香川県の個体群と差があるとは思えない。また、関東地方のアブラコウモリでは、前腕長32.8~34.2mm 頭胴長48.4~49.8mm、後足長(爪共)7.2~8.2mm、耳介長11.0~12.2mm、脛骨長11.8~13.0mm(今泉)の測定値があげられている。これと比較しても、差があるようには思えない。

の中で一番早く生長を完了するようである。他に早く生長する器官として、前腕、脛骨、耳介、耳珠があげられる。

3. 後足（爪共）を除くと、体の他の各部は、幼獣群と成獣群の間に明らかに差がある。
4. 香川県の個体群と、九州個体群、関東個体群の間には、差は認められなかった。

要 約

1. 幼獣（生後約1ヶ月）の中手骨長は、第2、第3第4、第5の順に長くなっているが、成獣では、第2中手骨長が一番短かく、第3、第4、第5はほぼ同長であった。また、幼獣の中手骨の関節は骨化が不十分であった。
2. 後足長の成獣に対する幼獣の比は93%で、体各部

参 考 文 献

1. 今泉吉典 1970：日本哺乳動物図説 新思潮社
2. 内田照章 1966：日本の哺乳類(5)哺乳類科学 11 5~23.
3. 吉行瑞子 1969：モモジロコウモリ *Myotis macrodactylus* の屋島個体群にみられた外部形態の変異 哺乳動 雑 4 107~111.